
闇烏

鴉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇鳥

【Nコード】

N97210

【作者名】

鴉

【あらすじ】

闇夜に舞う双子

二人の背中には羽がある

誰も二人のことは知らない

いや、知らなかった…

これから始まるゲーム

この二人は何を考え出すのか…

人数集め

今日も天使と悪魔は囁き合う。

私は九鬼^{きゅうき} 琴音^{ことね}あと少^{せう}しで、高校生。

いつも双子の兄、絃氣^{げんき}と2人で行動している。

何をやるにも2人で一緒。

私達双子は、悪魔の羽と天使の羽を持っている。

生後三ヶ月の双子

その隣には、絵師と2人の祖父が居た。

「本当に書くんですね？」

「ああ。今が一番よからう。」

琴音の背中には、蝶の羽にも見える色鮮やかな黒い羽と純白のドレスのような煌びやかな羽がある。

絃氣の背中には、カラスのようなボロボロの黒い羽と白鳥のようなふわりとした柔らかな羽がある。

絃氣の羽は性格そのもので、琴音の羽は外見そのものである。人を寄せ付ける外見。

しかし腹の中では何を思っているのか、考えているのか二人にしかわからない。

生まれてすぐに両親は死んだ。

その両親の代わりに育てたのが祖父の九鬼 総一郎である。

普通の家庭より複雑な家庭…

しかし、家の中にいる人達は絆が深い。

俗に言う「やくざ」なのだ。

やくざと言っても、お上を一番に考えたやくざである。

薬や売りはしない。

逆にそれを取り締まるのが役目。

餓鬼どもの喧嘩にも手を出さない。

しかし、周りの一般の人たちに手を出したら…

未だに義理やら人情がある組なのだ。

お上が出した答えは絶対。

だから、人の役に立つことを影ながらにしている。

もうすぐ春休みが終わり、中学生になる。

晴れやかな気持ちで普通は入学式を迎えるはずであった。

明日は入学式。

しかし、じいちゃんからお告げがありました。

お告げって言っても、たいした物ではない。

「高校生になるまでに、伝説のチームを復活させる」

それだけ

それだけって言っても、ものすごく大変…

一からメンバーを集めないといけないし

どんな風に構成するか考えなくちゃいけないし

やることは、山のようにある

人が一人増えるだけで、みんなが慣れるまで時間がかかるし

かといって、一気にメンバーを集められるわけではない

そこが一番大変かも…

先ずは、幹部からでも集めますか…

自分たちの部屋に入ると、幼馴染の来がいた。

「来。お前幹部ね」

「…頭大丈夫かよ。弦気…」

「弦気。説明なしはダメでしょ」

「メンドーなんですよ」

「はぁー。来、うちらね…じいちゃんに言われたの」

「何を」

「伝説のチーム復活」

「…あの爺。言ってること分かってんのか？」

「うん」

「で？構成は？」

「來が情報部のトップ」

「後は？」

「琴音と俺が、クイーンとキング」

「幹部はナイトって呼ぶ」

「後はどうにかして？」

「それだけは考えたの…けど…」

「飽きたんだろ。」

「「そう」」

「はあー。変なところで合わせなくても良いよ」

「わかった。けど、お前らがトップならそれ相応の奴らじゃないとダメなんだろ？」

「來、伝説のチームだよ？そこら辺のチンピラ集めても仕方がないよ」

「ああ。お前らのお気に入りは、いないのかよ。」

「來のお気に入りは、駆？」

「お気に入りじゃねえーよ」

「自分で言ったのにキレないでよ」

「まー、あいつは必要にはなる」

「後は、考えとくよ。弦氣がね？」

「思いついたら、連絡する。」

「分かった。まともな物を考え付いてくれよ」

「ああ」

何が起こるか分からない世界

自分の行動で周りにどれだけ影響すらかも分からない

だから、慎重に動く

今から始めるのは、遊びではない

自分の命をかけた

運命の決まる

ゲームが、始まる…

誰も止めることの出来ない

誰も見ることの出来ない

ゲーム

「ナイトは何人必要なんだ？」

「んー。3人かなー」

「五人でまとめるのか」

「そうだよ？」

二人だけの会話

來は歸った

…メンバーを探しに行った

この二人の我儘に付き合える奴で尚且つそれを必ず実行する奴

「ルールはどうすんだ？」

「弦氣が考えてよ！！」

「琴音は何すんだ？」

「喧嘩の強いやつを調達してくる」

「それは俺がするから、琴音はルールを考える。」

「イヤ。」

「怪我したらどうすんだ…」

「しないもん…」

…15分後

「分かったよ。琴音がルール決めればいいんでしょ！！」

「ああ。行ってくる」

いつも、いつも何で留守番しなきゃなんないかな！！
はあー

心配されてるのは分かってるんだけど

それじゃー性に合わない

今日は、我慢しよ…

眠いし

ヤバくなったら、暴れよ

ストレスは溜めたらいけないしね

ルール？女子禁制（クイーン以外）

ルール？一般市民に迷惑かけない

ルール？喧嘩は拳で！！！（男なら普通でしょ）

ルール？暴走は、組織が固まるまでしない（個人では自由。大きいのは禁止）

ルール？仲間は絶対に裏切るな（裏切り行為をした奴は…バイバイ）

ルール？特攻服はダサイから、すぐバレルから禁止（動きやすい服、靴）

ルール？ロゴやマークは組織が固まるまで作らない（他のチームにばれない様に動くため）

こんなもんかな？

思いついたら、その時に追加しよー

…寝よ

「お嬢。朝です。起きてください。」

「お嬢。坊はどこへ行っただんですか？」

「朝から、あんたら二人はウルサイっちゅうねん！！！！」

「すみません。」

「青、あんた思っただけなら言うなや」

「お嬢、口が悪くなってます。」

「紅！！！！これは元からや！！！！」

「それより、坊は…」

「知らん」

「学校に行く支度せなあかんから、出てくれへん？」

「はい」

はあーなんやねん

うちは、朝めっちゃ弱いねん
あつ。

琴音です。

なぜ関西弁かというのは、あとから出てくると思つので不思議に思
いながら待っていて下さい。

「お。今日は、入学式だな琴音。」

「だね。じいちゃんは、朝から元気だね」

「若い奴等に負けてられんからな」

「そお。勝とうと思つてゐるやつがいたら、見てみたいけどね」

「弦気はどうした？」

「さあ？知らない」

「おはようございます。頭」

「おはようさん。飯にするぞ」

「……いただきます」

おっさんの低い声が鳴り響いております。

そんなに元氣にあいさつせんでも食えるっちゅうねん……！

「ただいま！。腹減った……」

「坊風呂に入つて、着替えてから飯にして下さい。」

「ああ」

子供にものを言う父親みたいな口調で、旦那に言うセリフを言った。

「青は、いつでも父親になれるね。」

「早く、ひ孫の顔が見たい。」

「なんで、じいちゃんが出てくるん？」

「そら、ひ孫の顔見たいに決まってるだろ。」

「へえー」

「興味が無くなったからつて、その返しは爺が可哀そうだぞ。」

「爺言つてる弦気の方が可哀そうなこと言ってるよ。」

「いただきますーす。」

「流したな。」

「弦氣何しとつたんじゃ？」

「んーとね…強いやつ見つけに行ってた。」

「良いのは居たか？」

「何人かはね。」

「弦氣先に行くよ」

「はあー？待てよ！ー！」

「……………」

「琴音！ー！」

はあー

朝からうつさいねん…

寝てへんのちゃうんか？

はあー

溜息しか出てきませんよ…

中学って小学校と何が違うんだ？

規模？

私立だからアホな奴ばっかりなのは変わんないし。

「琴音。一人か？」

どいつもこいつも…一人の時間が欲しいんだよ！ー！

双子だからって、常に一緒にいるわけじゃないんだよ。

好きな人とかできたらどうする気だ？

まあー変わらない気がするんだよな…

「おーーい。起きてますかー？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9721o/>

闇烏

2011年1月16日01時35分発行